

Title	「存在」についてのノート
Author	藪木, 栄夫
Citation	人文研究. 31 卷 2 号, p.80-94.
Issue Date	1979
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	西村嘉彦教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

「存在」についてのノート

藪 木 栄 夫

このノートは2つの部分から成る。1つは、現代の分析哲学者、特にクワインの「存在」に鋭く関わった議論の概観であり、もう1つは、カントが認識論的にその存在を措定したものについての議論からする、カントの認識論の解釈に対する1つの問題提起である。

I

§ 1. カントの有名なテーゼに「存在（ある）は明らかに実在的述語でない。」 „Sein ist offenbar kein reales Prädikat.“ (*Kritik der reinen Vernunft*, A598/B626) というのがある。学校文法で述語として扱われる「存在する（ある）」が述語であるかないか、という問いが何故なされなければならないのだろうか。2つの答え方が可能だからである。この問いが肯定的に答えられる場合は、標準的な述語論理学の枠内で次のような限定がなされていると考えれば理解できる。たとえば、「地球を滅ぼすものが存在する。」の「 $(\exists x)$ (x は地球を滅ぼす)」への書き換えが、あるいは「丸い四角は存在しない。」から「 $(\exists x)$ (x は存在しない)」への推論が妥当であると考えられるのは、「もの」や「丸い四角」が个体定項としての機能をもつこと、「存在する（しない）」が述語であること、この2点が認められる限りにおいてである。他方、この問いが否定的に答えられる場合は、「(眼前に) テーブルが存在する。」という立言において、「テーブル」にどんな性質も付加されておらず、従ってどんな述語づけもなされていないと考えられる場合である。

否定的に答えられた場合、そのようには考えられないと言われるならば、「存在する」がたとえば「赤い」と同じ振る舞いをするかと問うてみるのがよい。「これは赤い。」という文において「赤い」は赤いという性質を確かに述語づけ、この文全体で赤いものを指示する立言となり得る。「これは存在

する。」という立言がなされたとしても、「これ」が指示するものとこの立言自身が指示するものとは同一であり、「存在する」は同一の指示を単に重複させる機能をもつにすぎない。従って指示に関しては「存在する」は不要なのである。⁽²⁾

肯定的に答えられた場合、それは学校文法での扱いと一致する。しかし論理的には「存在する」という述語はなくても済ませ得るのである。上の例文は次のようにその形を変えて述べてもその文意は同じだからである。「或るものが地球を滅ぼす。」「どんなものも丸く且つ四角でない。」一般に、「存在する」の文法上の主語は論理的には述語である。それ故「存在する」は論理的には述語としての扱いを受けないのである。

- (1) この推論は妥当なものではない。何故なら $(\exists x) (x \text{ は存在しない})$ は「存在しない或るものが存在する」と読まれるから。
- (2) 「……は存在する。」という立言は「可能的に存在する」から「現実的に存在する」をきわだたせているのだと主張されるときには、冒頭に挙げたカントのテーゼが効いてくる。

§ 2. 形を変えた表現の方が無用の詮索をしなくて済む。「丸い四角は存在しない。」ということが言えるならば、何についてその存在を否定しているのかというような物議が生じることとなったりするからである。そうするとしかし、存在すると言えるのは何についてか、存在しないと言えるのは何についてかという問いがすぐに出されるであろう。このときしばしば引き合ひに出されるのが、「存在するとは変項の値であるということである。」(‘To be is to be the value of a variable.’) というクワインの意味論的テーゼである。但し、このテーゼは何が存在するかという一般的な問いに答えるものではなく、与えられた意見や理論の中の束縛変項に留意することによって、それらの中で何が存在すると言われるかを知る為のものである。⁽¹⁾ 一般的な問いには、あらゆるものが存在すると言おうと思えば言えるとトゥリヴィアルに茫漠と答えるしかないだろう。クワインが問題にしているのは、或る意見や理論が妥当なものに見なされる為、何が存在すると言われているかを決める規準の探索である。

- (1) W. V. Quine, ‘On What There Is’, (1948), reprinted in *From a Logical Point of View*, (1953; Harper Torchbooks, 1963), p. 15f. 以下、FLPV と略記する。何度となく述べられるこのテーゼを認めるには次の2点に留意しなければ

ばならないだろう。束縛変項の値域が空でないと言う為の論拠があること。たとえば $(\exists x)(x > 10^{1000})$ によって正整数の存在を語るとき、変項の値域が 10^{1000} より大きい正整数を含むことを論証しておかねばならないということ。

なお、次を註としておく。動詞 'to be' には3つの用法、即ちコプラとしての、存在を表示せんとする、言明が真である (veridical) ことを表示せんとする、用法がある。第3の用法に '=' が含まれる。Cf. Kahn, C. H., 'On the Theory of the Verb "To Be"' in *Logic and Ontology*, ed. Muniz, M. K. (New York Univ. Press, 1973); Muniz, M. K., *Existence and Logic*, (New York Univ. Press, 1974), pp. 59-61. 上のクワインのテーゼにおいて、最初の 'to be' は存在を表示せんとする, 'is' とその次の 'to be' はコプラとしての用法である。'is' は文全体が真であることを表示せんとする用法を併せもつ。

§ 3. クワインは別の所で明言している。「総じて私自身の立場は、1つの理説の存在論上の前提は、量化子が結びつけられる世界の内にその理説が真である為にあらねばならない (must be) 対象だけから成る、というものである。」⁽¹⁾ もっと端的に「量化はすぐれて存在を表現する語法である。」⁽²⁾ しかし意見ないし理論ないし理説を真とする為の対象が存在すると言えるのは、量化という論理学の工夫によってのみであろうか。或る文を存在汎化できるからといって、その文が存在する何かを指示するとは限らない。「ソクラテス」も「ペガサス」も存在汎化できる文の個体定項であり得る。しかし「ソクラテス」には存在を帰し、「ペガサス」には存在を帰さないのは何故か。「ソクラテス」は言語外の対象を指示する語であり、「ペガサス」はそうでないと前もって知っているからだと答えざるを得ないだろう。表現が指示するものであるか否かは、存在汎化が可能か否かのみで決まるのではない。このことは勿論クワインも承知している。語Wが指示語かどうかを判定するには、「Wに関する存在汎化が妥当な形の推論として受け容れられるかどうかを決めなければならない。」⁽³⁾ けれどもこの受け容れの根拠は何か。自然言語や科学の文派において受け容れられる推論が妥当なものであると答えられるとしても、存在汎化が間違っ⁽⁴⁾てなされた事例を見出すことは可能である。たとえば、フロギストン。存在汎化できる為には、先ずWが存在する或るものを指示する語であることを確認する必要があるだろう。この確認の手続きがあるか。

クワインの構想するところでは、⁽⁴⁾ラッセルのタイプ理論における規則と似

た規則に従って指示語が呼ばないシクラスのような語の階層その代入例はの語が指示す
(1) "Symp (1951), 4 in *FLPV*, インの註 明晰性を and the Chomsky, 評した論 cal Comm (2) Quine, York: Ph (3) Quine, *Mical A* Crofts, (4) Cf. *C* cation o 要点は ていな (3x) できな § 4. (name) 関係で存 とではな クワイン 句に置き

た規則に従って階層づけられる (stratified) 対象を表わす語のメンバーとして指示語が導入される。0 階の語が対象を指示し、第 1 階の語が対象の性質ないしクラスを指示し、第 2 階の語がクラスのクラスを指示し、……。このような語の階層的序列を認めた上で、個体変項の量化だけが当座は許され、その代入例は 0 階の語、即ち具体的個物を直接指示する語に限られる。0 階の語が指示する具体的個物だけが存在すると当座は認められるのである。

- (1) "Symposium: On What There Is" by Geach, Ayer and Quine, in *PASS* (1951), p. 153. また, cf. Quine, "Logic and the Reification of Universals", in *FLPV*, p. 103. この行文で 'must be' が用いられていることに関して、クワインの主張は意味の理論 (指示の理論から区別された) の要素を混入しており、明晰性を欠くという批判がなされるであろう。Cf. Cartwright, R., "Ontology and the Theory of Meaning", in *Phil. of Sci.*, 21 (1954); Scheffler, I. & Chomsky, N., "What is said to be", in *PAS.*, 59 (1958-9). クワインを論評した論文は外にも多くあるが特に次を挙げておく。Church, A., "Ontological Commitment", in *The Journal of Philosophy*, 60 (1958)
- (2) Quine, "Existence" in *Physics, Logic and History*, ed. W. Yourgrau (New York: Plenum Press, 1970), p. 92.
- (3) Quine, "Designation and Existence" (1939), reprinted in *Readings in Philosophical Analysis*, eds. H. Feigl and W. Sellars (New York: Appleton-Century-Crofts, 1949), p. 49.
- (4) Cf. Quine, "New Foundations for Mathematical Logic", "Logic and the Reification of Universals", in *FLPV*, p. 90ff., p. 123ff. クワインのタイプ理論の要点は次にある。式 ' $(\exists x)(y)((y \in x) \equiv \phi)$ ' においては、 ϕ は stratify されていなければならない、且つ ϕ は 'x' を含んではならない。この規則の下で ' $(\exists x)(y)((y \in x) \equiv \sim(y \in y))$ ' から ' $(\exists x)((x \in x) \equiv \sim(x \in x))$ ' を推論できない。何故なら ' $\sim(y \in y)$ ' も ' $\sim(x \in x)$ ' も stratify されていないから。

§ 4. 語が指示する (designate) と言われる場合、語とは特に名前 (name) ないし単称名辞 (singular term) であるが、「名前-指示」という関係で存在するものについて語ることは、実はクワインにとって基本的なことではない。「名前は存在論上の議論には全く重要なものではない。」⁽¹⁾ と言うクワインの論拠は、ラッセルの確定記述の理論の延長上にある。名前を記述句に置き換えることによって、あるいは名前の動詞化⁽²⁾によって、その名前を

含む文はその名前を含まない文に分析され得る。たとえば、‘Socrates is wise.’ は、‘ $(\exists x)(x \text{ socratizes} \ \& \ (y)(y \text{ socratizes} \ \supset \ y = x) \ \& \ x \text{ is wise})$ ’ に。かくして、存在するものについて語る際、われわれは名前を必要としないのである（ぎこちなさを承知の上でこうするのが分析の目的を達する。）。

のみならず、名前をもたないが、存在するとわかっている対象を含む理論がある。たとえば、実数論。このような場合にも、‘ $(\exists x) (x \text{ は実数である})$ ’ と表現してよく、実数の濃度は超可算無限であるから名前をもたないような数を変項の値としてよい。ここで、存在するものについて語る枠組みは名前ではなく、束縛変項と述語づけ (predication) である。個々人の名前を知らなくとも、あるいはそもそも名前がなくとも、‘ $(\exists x) (x \text{ は人間である})$ ’ と表現して、何が存在すると言われるかを語るができる。この語り方は、しかし、前出のテーゼによる語り方と異なるものではない。「理論がどんな対象を要請するかを言うもう1つの仕方は、理論が真である為には理論の幾つかの述語を付けて真でなければならぬ対象がそのような対象である、と言うことである。しかしこれは、理論が真である為には変項の値であらねばならぬ対象がそのような対象である、と言うのと同じである。」⁽³⁾

ところで、述語が表わすのは性質かクラスである。述語「人間」は、人間であるという性質と個々の人間のクラスを表わす。けれども言うまでもなく性質とクラスは混同されてはならない。「人間」と「羽根のない2足動物」とは、クラスにおいては同じだが性質においては異なる。外延と内包の相違である。クワインの議論の方向は、内包を捨て、述語の外延としてのクラスを「本来概念上のものであり、人間によって創造されるもの」と見なした上で、クラスを具体的対象を指示する理論の次元で扱おうとする。これが充分にできるか否かが問題である。クラスを量化した表現を個体を量化した表現に還元できるか否か。

クワイン自身が示しているように、次のような場合にはクラスの消去は不可能である。クラスに関して存在量化と普遍量化とが同時になされる場合。たとえば、‘ $(x)(y)(\exists \alpha)(\beta) (x \in \alpha, \supset y \in \alpha : \supset y \in \beta, \supset x \in \beta)$ ’。更に、「祖先」という述語を定義する場合。更にまた、同一性を充分に定義する場合。このような場合にはクラスの量化が必須であり、クラスの存在が前提されざるを得ないのである。

(1) Quine, ‘On What There Is’ in *FLPV.*, p. 12.

- (2) Quine, *op. cit.*, pp. 7-8.
- (3) Quine, "Existence and Quantification" in *Ontological Relativity and Other Essays*, (Columbia Univ. Press, 1969), p. 95.
- (4) Quine, "Logic and the Reification of Universals" in *FLPV.*, p. 123.
- (5) Quine, *Methods of Logic* (rev. ed., New York, 1950), pp. 227-230.

§ 5. このように前提されたクラスは、個体ではなく、普遍 (universals) であり、具体的に存在するものではなく、抽象的に存在するもの (abstract entities) である。抽象的存在者は得ようと思えばいくらでも容易に得られる。たとえば「白いもののクラス」、「犬類」、「長さ」等々。このようなもののそれ自体としての存在を食い止める試みをクワインは、自身のタイプ理論を駆使することによって遂行する。

「はじめに具体的対象のみがある。そしてこれらを純潔な量理論の束縛変項の値と考えるとよい。これらを階型 0 の対象 (objects of order 0) と呼ぼう。」この対象について語る言語 L_0 が措定され、次に、「そのメンバー性が L_0 において表現し得る或る条件に等価であるようなクラス」が構成され、階型 1 の対象と呼ばれる。この対象について語る言語 L_1 が措定され、次に、「そのメンバー性が L_1 において表現し得る或る条件に等価であるような種類のクラス」が構成され、階型 2 の対象と呼ばれる。一般に、「階型 $m+1$ のクラスは L_m の中で定式化できる条件に従って階型 m からそのメンバーを得る。」このような手続きを踏むことによって、「変項の値として認められるクラスと関係の領域は次第に広がる。」しかしどんなに広くなっても、階型 $m+1$ のクラスは、「見出されるものではなく、構成されるもの」であり、その構成メンバーは基本的には具体的対象に由来しなければならない。クラスの存在について語るときには常に具体的対象について語る為の条件——それによるクラスと具体的対象との連結がどれ程間接的であろうとも——が与えられていなければならないのである。これが、クワインのクラスについての考え方の要点であると言ってよいであろう。クラスの存在は認められる。だが、認められるのはこのような考え方を前提にしてこそである。⁽¹⁾

(1) Quine, "Logic and the Reification of Universals" in *FLPV.*, pp. 123-5.

(2) ここで1つ疑問を出しておこう。述語の外延としてのクラスの量化は認められる。しかしこの場合、クワインの言う意味での構成可能なクラスとは考えられな

いクラスの存在を認めなければならないのではないだろうか。何故なら、述語のクラスPの補クラスはPのメンバーと関係せず、且つその補クラスも言語表現のクラスであると考えられる以上、述語を表示する言語表現より多くの言語表現（これもまた述語である。）のクラスが存在することになるから。従って、定式化がなされる以前に存在していなければならないクラスを認めざるを得ず、クラスの量化を含む形式言語から、どんな言語表現も表示しないクラスの存在を消去できないこととなろう。

§ 6. 何が存在すると言われるかという問いに対して、束縛変項の値であるものが存在すると答えられた。その値であるものは物理的対象とクラスである⁽¹⁾。比較的早い時期のクワインは物理的対象についての文を感覚所与についての文に還元する可能性を考えていたふしがある⁽²⁾。後期には、感覚所与を⁽³⁾斥け、物理的対象に実在の地位を与えている。本稿ではこの変化の経緯には触れないが、クワインにとって、物理的対象は素朴実在論の言うそれではなく、特有の意味で理論的にその実在が措定されるという性格が強い。「時空において4次元のものとして考えられる物理的対象は、出来事 (events) あるいは語の具体的意味における過程 (processes) から区別され得ない。各々の物理的対象は、どれ程異質であれ、単に時空の或る部分の内容から成る。その部分がどれ程切れ切れで任意に改変されるものであっても⁽⁴⁾」

現象論も道具主義も、 $(\exists x)(Tx)$ —— 'T' は理論述語 —— の実在を認めないであろう。クワインはこれらの立場を採らない。但し、理論的に存在するとされるものは、抽象的自体的に存在するとされてではなく、述語の外延のクラスと見なされてのことである。

個体のみが存在すると言うのではなく、⁽⁵⁾クラスも存在すると言えるのは、理論的に存在するとされるものが上の意味で存在すると言うのと類比的である。算術における変項の値として唯一のものは、基本的にはクラスである。個々の数は夫々、それ自体としてではなく、或る具体的対象のクラスのクラスとして統制されてはじめてその存在が認められる。だが他方で、クラスの存在を認める必要があるのはこのような場合に限らない。典型的な例は祖先⁽⁶⁾関係を定義する場合である。充全な定義は巧妙な手続きを必要とするが、要は次にある。「xはyの祖先である。」は、「xは、yを含み且つメンバーの親全員を含むクラスのすべてに属す。」と精密に書き直され、これは、 $(\alpha)(y \in \alpha \ \& \ \alpha \text{ のメンバーの親全員が } \alpha \text{ に属す} \supset x \in \alpha)$ 、即ち

‘ $(\alpha) (y \in \alpha \ \& \ (z)(w)(w \in \alpha \ \& \ Pzw \supset z \in \alpha) \supset x \in \alpha)$ ’ と定式化される
 (‘P’ は「親である」の記号)。

クラスが数学においてのみならず、ごく普通の言語表現の分析にも役立つというところにクラスの存在意義があると言えよう。同様に、感覚所与ではなく、物理的対象に存在を認めることは、これが自然認識において普遍的で簡潔で正確な知識をもたらすことに意義があるからである。

- (1) クワインがこれを明言している箇所として、たとえば cf. “The Scope and Language of Science” in *The Ways of Paradox* (Random House Inc., 1966), pp. 229–31.
- (2) Cf. “On What There Is” in *FLPV.*, pp. 17–8.
- (3) Cf. *Word and Object* (MIT. Press, 1960), pp. 234–8; “Epistemology Naturalized” in *Ontological Relativity and Other Essays* (Columbia Univ. Press, 1969), pp. 69–90; “Grades of Theoreticity” in *Experience and Theory*, eds. L. Foster and J. W. Swanson (Univ. of Massachusetts Press, 1970), pp. 1–17. *Word and Object* はクワインの哲学の大部分を尽している。この書については、土屋純一「書評 クワイン『ことばともの』」(『哲学研究』492, 昭和39年)を参照。
- (4) *Word and Object*, p. 171.
- (5) Cf. Goodman and Quine, “Steps Towards A Constructive Nominalism” in *JSL.*, 12 (1947). グッドマンの「個体」については、松本晋「個体の論理」(『京都産業大学論集』第7巻第2号, 昭和33年)を参照。
- (6) Cf. Quine, *Set Theory and Its Logic* (Harvard Univ. Press, 1963), § 15.
- (7) 「親である」を「加える」で読みかえると、この式は算術における後続者関係の定義である。

§ 7. 語の意味を明晰にすることや定量分析やによって知識の正確さを期すことは、科学にとって必須の要件であるが、科学理論は体系として普遍性と簡潔性を求める。けれども、簡潔性を犠牲にすること、たとえば新たな仮説(とそれに対応する存在するもの)を立てることによって、普遍性が保障されると思われるかもしれない。その逆も言えると思われるかもしれない。普遍性と簡潔性とは表裏の間柄にあると思われるかもしれない。体系を形成すべき科学は、如何に多くを如何に少ない前提で説明できるかを探究する。普遍性に重きを置かんが為に、「オッカムの剃刀」の含意するところを忘れ

てはならないであろう。しかし普遍性および簡潔性の一義的な規準をつくることは科学の方針ではない。

或る理論の中で何が存在すると言われるかという問いに対して、その理論の中の束縛変項の値が存在すると答えることができる。問題を更に進めて、何が存在すると言う理論を採用すべきかと問われるならば、上の普遍性と簡潔性とが論議にかかわってくる。クワインから引用しておこう。「思うに、われわれが或る存在論を受け容れることは、或る科学理論、たとえば物理学の体系を受け容れることと原理上同じである。少なくともわれわれが合理的である限り、生の経験の無秩序な断片に適合することができ、且つそれらがアレンジされることができる最も簡潔な概念図式を採用する。われわれの存在論は、最も広い意味での科学に適うべき全面的な概念図式をいったん固めれば、決定されるのである。」⁽¹⁾

「しかし、現実⁽²⁾にどんな存在論を採用すべきかという問題は未解決のままである。そしてはっきりと勧告できることは、寛容さと実験的精神が大切だということである。」⁽²⁾

(1) "On What There Is" in *FLPV.*, pp. 16-17.

(2) *Op. cite.*, p. 19.



今引用した行文が書かれて20年後、クワインは次のような相対主義的テーゼを掲げた。「或る理論の対象が何であるかを言うことには、その理論を如何に解釈するかを、あるいは別の理論で如何に再解釈するかを言うこと以上の意義はない。」従って、或る理論を十分に解釈できなければ、その理論の存在論は基本的に不可解である。或る理論の十分な解釈は、第1にその理論がどんな文から成っているか、第2に変項の値として何が採られているか、第3に述語文字を満たすものとして何が採られているか、を「われわれ自身のことばに相対的に、そしてそのことばの背後にあってわれわれが全面的に精通している理論 (our overall home theory) に相対的に」特定することである。⁽¹⁾従って、或る存在論も相対的にのみ⁽¹⁾特定され得る。しかしこの our overall home theory とは何か。特に、「われわれ」を広い意味にとるとき、この理論は何か。(→「厳密翻訳の非決定性」)

クワインは、何が存在すると言われるかについて出来るだけことばを少なくして済ませたいのかもしれない。「存在論ないし存在論的かかわりにおいて出来る限り弱い

体系へと進む為に、その体系がかかわろうとするものに関して、或る段階で明晰であるよりももっと明晰である必要がある。⁽²⁾

(1) "Ontological Relativity" in *Ontological Relativity and Other Essays* (Columbia Univ. Press, 1969), pp. 50-51.

(2) "Existence" in *Physics, Logic and History*, ed. W. Yourgrau (New York: Plenum Press, 1970), p. 103.

II

§ 8. さて、クワインの所論を何らかの特定の理説、ここではカントの認識論に適用してみるとどうなるであろうか。量化されるどんな文からこの理論は成り立っているか、と一般的に問うこともできる。けれども、ここでは問題を絞って、クワインの用語とはおよそかけ離れていると思われる「超越論的对象 *transzendentaler Gegenstand*^{*}」というものの存在の意味を尋ねよう。果してそれは存在すると言えるだろうか。言えるとする、超越論的对象が変項の値となっている文は、カントの認識論が真である為に、どのような役割を荷っているのか。

§ 1の冒頭に挙げたカントのテーゼに従うと、「xが存在する」という文形式は、実世界についてのどんな判断をなす形式でもない。何故なら「存在する」は *reales Prädikat* でないから。それ故単なる「超越論的对象が存在する。」は判断ではない。そこで、超越論的对象の存在を判断する文形式は「 $(\exists x)(x \text{は超越論的である})$ 」でなければならない。かくして、述語「超越論的」の意味が結局は問題となってくる。「x」の値域も予め特定することはできない。

* 超越論的对象と物自体とはしばしば混同されて論じられる。しかし、両者には、前者は現象が認識された客観となる為の超越論的(方法論的)根拠、後者は *affektion* によって我々に現象を提示するという意味で現象の因果的・実在的根拠であるという相違が認められる。

§ 9. 「超越論的」が冠置される用語は1つ1つ挙げるまでもなくカントの体系内に多くある。しかしたとえば超越論的現象とは言われない。何故か。その理由は、現象は通常の感覚の生の対象だからであり、一般に経験的認識の直接の質料は超越論的と言われないからである。超越論的空間とか超越論

的時間とかまた超越論的悟性概念とも言われない。何故か。空間、時間、悟性概念は認識の形式として、知識を獲得する為の直接の純粹な要素だからである。言うまでもなくカントの構想では、そのような要素が現象に適用せられて現象に統一がもたらされるところに、客観的妥当性を保障された知識が成立する。数学と経験的知識とを問わずそうである。

しかしその客観的妥当性を保障する論拠は何か。自然界に見出される経験的規則性に基づく信念に落ち着くことでカントは満足しない。その論拠を固有の論理で追究する議論が超越論的と呼ばれるのである。曰く、「空間の超越論的究明」、「純粹悟性概念の超越論的演繹」、いわば意味論的規則としての「超越論的時間規定」、等々。そこで、「対象にではなく、対象についてのわれわれの認識の仕方に、この認識の仕方がア・プリオリに可能である限りにおいて、一般的にかかわる一切の認識を超越論的と名づける。」(A12/B25)これが「超越論的」の第一義的規定であり、且つこれ以上の規定を要しない。今様に言い換えると、経験的知識を述べる対象言語について語るメタ言語によって定式化される経験的知識の基礎・方法についての議論を超越論的と呼んでさしつかえない。何が存在すると言われるかについての語り方についての議論も超越論的と呼んでよい。

上のカントの規定において「ア・プリオリ」が問題であるが、この語のカントの体系内での意味は、あらゆる感覚知覚から独立に与えられる形式的要素が、個々の感覚知覚を一定の脈絡の経験的知識に仕立て上げる、という程に理解しておいて本稿の進み行きに支障はない。

健全な超越論的議論は数学と経験的知識の起源と客観的妥当性の確保とについての議論に限られるべきであることをカントは強調する。この制限を逸脱すると、実体と見なされた心などの所謂「超越論的仮象 *transzendentaler Schein*」に陥る。けれども、陥ったことを論断することも陥らないように警告することも、上の議論と同様、健全な超越論的議論である。そうして、それらは「超越論的論理学」という広い論議領界を覆う章題の下で論じられる。

この論議領界の中で、偽である文の変項の値が超越論的仮象であり、真である文の変項の値の一種が超越論的对象である。真である文は「超越論的真理 *transzendente Wahrheit*」(A146/B185)を形成する。——このような割り切った語り方をカントがしているわけではない。これは、カントの認識論の超越論的レヴェルについてのわたくしの解釈の見通しである。見通しに

過ぎないが、
理なる構想を
論の中枢を反

§10. か
保障せんと
けれどもそ
理由は、超
批判)の第
しれず、従
る。しかし、
が同義に使
っている次
カテゴリー
能に関して限
統覚は……
する。(B154
カテゴリー
般を思惟する
この超越論
Xである。)と
の関係、即ち
超越論的客
象したもの(こ
念)を感性に
対象の概念の
これらの
次にあると
るだけの或
も具体化さ
でない。し
からない異
識すること

過ぎないが、あらゆる経験的真理に先立って、これを可能にする超越論的真理なる構想をカントが展開したことは確かであり、この構想がカントの認識論の中樞を成すと言ってよい。

§ 10. かくして、超越論的对象とは、数学と経験的知識の客観的妥当性を保障せんとする超越論的真理を表示する文の変項の値であると考えられる。けれどもそのような文の実例を挙げることは困難であるかもしれない。その理由は、超越論的对象という語を表だって用いて議論されるのは『純粹理性批判』の第一版であり、第二版の議論とずれが生じていると考えられるかもしれない。従って一貫した解釈をすることができないかもしれないからである。しかし、超越論的对象ないし超越論的客観と対象一般ないし客観一般とが同義に使われていることを考慮すれば、変項の値として超越論的对象をとっている次の文は夫々超越論的真理を表わすと解釈できよう。

カテゴリーとは対象一般の概念であり、それによって対象の直観が判断の論理的機能に関して限定されたものと見なされるのである。(B128)

統覚は……カテゴリーの名の下に、あらゆる感性的直観に先立って客観一般に関係する。(B154)

カテゴリーは、客観が与えられる特殊な仕方(感性)を顧慮することなく、客観一般を思惟する。(B309)

この超越論的对象(実にそれはわれわれのあらゆる認識において常に同一のもの=Xである。)という純粹概念は、われわれのあらゆる経験的概念一般に対して対象との関係、即ち客観的実在性を与え得る。(A109)

超越論的客観は認識の対象そのものではなく、対象一般という概念の下に現象を表象したものにすぎない、……カテゴリーも……超越論的客観(或るもの一般という概念)を感性において与えられるものによって規定し、それによって現象を〔諸々の〕対象の概念の下に経験的に認識する為に用いられる。(A251)、〔 〕内筆者。

これらの行文の含意するところは重複し、また解釈がむづかしいが、要は次にあると考えられる。(i) 超越論的对象は単にカテゴリーにのみ対応するだけの或るものであり、且つそのものとしてはどんな感性的性質によっても具体化され得ない或るものである。従って(ii) それは経験的知識の対象でない。しかしそれを予め指定しておいてこそ、まとまりがあるかないかわからない現象を統合統一して一対象あるいは一連の出来事として経験的に認識することが可能である。それは、最も基本的なものとしてはいわば焦点の

ようなものである。焦点距離は変わるが焦点そのものは常に同一である。但し、点にこだわるべきではない。(iii) そのような焦点の如きものとしての超越論的对象がその場その場の諸現象のつながりを浮彫りにすることによって、あらゆる経験的概念に客観的实在性を保障する。(超越論的对象のモデルはいろいろな角度から考える必要がある。)

たとえば、「それは、(上から見ると)楕円形の、波模様のついた、半透明の、葡萄が盛られた、器である。」と言った場合、わたくしのこの判断は、夫々の性状をひとまとめにした経験的一対象の表象であり、そこにおいて器という経験的概念に客観的实在性が与えられている。たとえわたくしの感覚機能に直線を曲線と見る程度の異常があろうとも、そうである。そうであるのは、ひとまとめにする機能は主観の側に求められるが、そのひとまとめが可能である基盤は対象の側に求められるからである。この基盤が超越論的对象である。そこで、超越論的对象は「統覚の統一の相関者 Korrelatum」(A250)とも呼ばれるのである。統覚が機能するところ常に超越論的对象があると云ってよい。

§ 11. 数学と経験的知識の客観的妥当性を確保せんとするカントの超越論的議論が、その意図を達しているか否かは速断できない。超越論的議論の論議領界に超越論的对象が存在するという論旨はそれなりに理解できると考えられる。しかしこの超越論的对象は、具体的個物でもクラスでもない。まさに超越論的としか表現しようのないものであり、経験によって把握され得るものでは決してない。そのようなものが、超越論的議論の枠内においてであれ、対象の側に措定されたことがカント解釈の上で問題となりはしないか。

カントの認識論は、客観に対する主観の優越性を説き、とりわけ超越論的統覚の統合統一にその頂点をもつ超越論的主観の構造と機能の緻密な分析が経験的認識の可能な所以を明らかにした、と解釈されるのが普通であろう。このとき、統覚の統一の基盤が超越論的对象にあると云って、超越論的对象の存在を容認することは、主観の優越性を侵害することになろう。何故なら、超越論的对象は、超越論的統覚の統一の相関者と呼ばれることによって、超越論的議論の中で超越論的統覚と少なくとも同等の権利をもってその存在意義を主張するであろうから。もしそうだとすると、所謂「コペルニクスの転回^{*}」もカント哲学の核のところ挫折していることになるであろう。

超越論的对象は超越論的主観内存在だと云って、問題を素通りする途もあ

るかもしれない。けれどもこの途は安易に過ぎる。むしろ、超越論的議論が経験的知識の客観的妥当性を基礎づけるべきならば、超越論的主観が一人歩きすることは許されず、何らかの対象との相関においてこそ十分に機能すると考えられたと解釈すべきである (vgl. A104)。その対象が主観内存在だと言われても、やはり特別な意味で主観に対置される対象であることにかわりない。

* 但し、この語に相当する源語は見られない。„der erste Gedanke des Kopernicus“ (B XVI) という表現によってカントが言おうとしたことは、科学の確立していない段階と確立した段階を区別すること、古い科学理論が妥当性を失ったとき新しい出発点となる思考が、従って思考方法の変革が必要であることを意味した。そこに登場させられたのが言うまでもなくア・プリオリな総合判断が可能であるという主張であるが、これが意図したところは、認識能力が対象（の変化や関係）に従属して認識を進めるのではなく、その逆の従属を肯定することによって知識の進展と確実性と客観的妥当性を保障せんとするところにある。

§ 12. それでは、全体としては主観の優越性を説く認識論において、超越論的对象の存在が何故容認されるに至ったのか。

カントに依れば、われわれのなす判断の最高能力は超越論的統覚であるが、それが正しく機能するには超越論的对象を相関者としてこれに依拠しなければならない。たとえるならば、焦点の合うレンズないし水晶体であってこそ、視覚は物を適切に捕える。焦点が或る程度以上合っていないければ、物はわれわれの正常な表象とならない。ところが、現象が超越論的对象を介して超越論的主観によって把握され判断されると言われる場合、その把握と判断は常に誤ることはないと言われる。誤り得るのは超越論的对象に焦点が重なっていない場合である。重なっていないのは、主観の機能に操作ミスがあるからであって、対象に誤差があるからではない。何故なら、超越論的对象は「常に同一のもの」であり、誤差を生じたり変易するものでは決してないから。かくして、われわれの判断が真である場合、その真は超越論的对象によって確保されていると解釈される。その判断が公共的であり得るのも、現象についての私的な表象と他者の表象とが同一の超越論的对象を媒介にしているからである (vgl. Kant an Beck, 1. Juli 1794, Ak. Bd. 11, S. 515)。

このように解釈してくると、カントにおける超越論的对象は、デカルトに

おける「欺かない神」と類比的である。但し、知識が真であることの基盤として存在するという点において両者は類比的なのであって、それ以外の点では異なる。しかしこの類比はカントを解釈する上で問題であり重要である。周知のように、神の存在の存在論的証明を否認したカントは、その論拠を「存在は明らかに実在的述語でない。」に求め、論理的に可能な概念に対応するものが存在すると言えるには、「概念の外に出なければならない」(A601/B629)と論考した。神の概念に対応する存在者が感性的直観に与えられてこそ、神は存在すると言える。これは、1763年の『神の現存在の唯一可能な証明根拠』の論旨と変わらない。しかし『批判』では、存在するものの存在は「措定・定立 (Position)」(A599/B627)——神によるのではなく、超越論的主観による「措定・定立」——であると言われることによって、存在は超越論的主観性をより色濃くしたと解釈される。そうであるならば、現象を認識する主観の側の枠組みが如何に整備されたものであり、現象がそれによって認識の客観となると主張され得るとしても、その枠組みによる認識が任意のものでない為には、認識の客観が現に存在すると言える為の基盤がなければならない。その基盤として導入されたのが、デカルトの神に代る超越論的対象ではないだろうか。もしそうだとすると(カントがこの交替に気づいていたにせよいなかったにせよ)、この特別な意味においてではあるが、認識論をその中枢で基礎づける存在論上の前提が置かれていることになり、主観の客観に対する優位を強調するカント解釈は、この要点を見過してきたのではないかと考えられるのである。

4 前
的連
コミ
語表
いか
前提
立す
買物
する
単な
用い
RM
の採
り、
語句
二元
し、
それ
則の
主張
(sens
る。
は、
い。
す